令和３年度　学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	４年間の目標（令和２年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価（３月 12 日実施）	総合評価（３月 31 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	・国際教育を推進し、質の高い英語教育と多様な言語や文化を学ぶことにより、豊かな世界観を身に付け、国際社会の課題を認識し、問題解決能力を発揮してグローバルリーダーとして活躍できる人材の育成を図る。	・教科横断型のカリキュラムマネジメントを実践する。 ・総合的な探究の時間のあり方を研究する。	・思考力、判断力、表現力を重視した生徒主体の授業を実践する。他教科の授業見学及び研究授業の実践を多く取り入れる。 ・課題研究を通して、継続的に問題解決能力を身に付ける指導計画を構築する。	・教科または全体での振り返りで、授業改善がみられたか。 生徒による授業評価の結果で、充実した学びができたか。 ・課題研究活動を効率的に指導及び評価できる方法を作成できたか。	・教科の研究協議において、問いの立て方や学習の振り返りの機会の充実に関して実践共有を行った。生徒による授業評価では、特に課題解決の場面の充実について好意的な回答が得られた。 ・課題研究活動において、インターネットを活用した指導方法の発展と共有を図ることができた。	・他教科の授業見学については、まだ精力的に行われていない状況であり引き続き効果的な推進のあり方について検討する必要がある。 ・課題研究活動において、今後教員一人当たりの担当生徒数が増加する可能性もあるため、引き続きより効率化を図る必要がある。	・令和２年度に策定した４年間の目標は、横浜国際高等学校らしい立派な内容であったと考える。それを踏まえた令和３年度の目標も無理のないものであり、新学習指導要領に沿った内容であると考える。 ・校内評価において、「他教科の授業見学が十分になされていない」とあるが、公務多忙な環境ではやむを得ない事と考える。	・今年度の成果として、授業改善の機会の充実が挙げられる。例えば、公開研究授業では、学校外からの見学者も交えてより良い指導の在り方を模索することができた。また、授業見学や生徒による授業評価に基づく協議を通じて、組織的な授業改善に取り組むこともできた。 ・今年度の課題は、他教科や国際バカロレアの指導のノウハウを学校全体で共有する機会が十分に得られなかったことである。	・他教科や国際バカロレアの指導のノウハウを学校全体で共有する機会の充実を目指す。具体的には、授業見学において他教科の授業を見学しやすいようなシステムを構築する。 ・また、国際科と国際科国際バカロレアコースそれぞれの授業の良さをお互いが取り入れられるよう、生徒による成果発表の場面等の更なる活用について検討する。
2	（幼児・児童・） 生徒指導・支援	・多様で柔軟な生徒支援体制及び相談体制の確立を図り、規範意識を身に付けさせるとともに、生徒の自己理解と相互理解を深めるきめ細かな指導・支援を行う。	・生徒を取り巻く個別・全体的な状況の把握に努めるとともに職員間での情報共有を行い、生徒・保護者が相談しやすい教育相談体制の構築を行う。 ・生徒の規範意識を醸成するとともに、相互コミュニケーションの在り方を考えさせる指導を行う。 ・自主自立につながる生徒支援体制を確立する。	・各年次や保健室、カウンセラーとの連携・情報交換を行い、生徒の状況の早期把握に努める。教育相談やこころの悩みの相談についての情報提供を適切に行う。 ・インターネット上のコミュニケーションツール等の適切な活用と他者の人権への配慮を指導する。 ・生徒の自主的な活動が、組織全体の動きを見通した形で運営できるよう指導助言を行う。	・生徒の状況や変容に気づき、職員間での情報共有をもとに適切な対応ができたか（振り返り） ・職員が様々なコミュニケーションツールについて理解し生徒への指導・助言が適切に行われたか。（振り返り） ・生徒の活動を把握し、必要な単位での指導・助言が行われたか。（振り返り）	・生徒の状況把握については年次により多少の差があったが教科担当や担任が情報交換をまめに行うことができた年次もあり、個々の生徒に対しての支援が連携して行えたケースが見られた。 ・SNS 等の使用についての指導については各 HR や行事等を通して行えた。 ・生徒会活動が潤滑に行えるように生徒とのミーティングを行い助言した。	・年次により情報交換の差があったのでグループ中心に連携等適切に行えるようさらに取り組んでいく。 ・SNS 等の使い方の指導については来年度、いろいろな資料を使い行っていきたい。 ・コロナ禍において学校行事が中止・縮小していく中で、生徒・職員共に引継ぎが充分にはできず、支援が後手後手になってしまった。来年度は過去の踏襲にとらわれず取り組み支援していく。	・SNS 等の使用に関する指導は、どの学校においても喫緊の課題であると考える。啓発ポスターや動画の利用、専門家の講演等を活用しながら、生徒主体の生徒指導が効果的と考える。 ・コロナ禍で学校行事に制約があり生徒達は本当に気の毒な状況にある。ICT を活用して、従来の学校行事に縛られない内容を工夫する必要がある。	・今年度の成果として各年次情報交換の意識が高まった。また組織的に対応が構築されてきた。生徒指導関係でも職員全体でしっかり共有し、それぞれのケースに対して連携して支援することができた。 ・新型コロナウイルス感染症に関して、感染対策の意識付けをさらに強めることができた。毎日の健康観察や黙食の意識、手洗いや手指消毒等職員が一丸となって指導した。 ・コロナ禍であったが、生徒会役員の生徒と連携し各種行事を行うことができた。	・教育相談体制のさらなる充実に向けて取り組む。職員への情報提供や情報共有等をこまめに行う。 ・生徒会行事について、委員会活動を中心にさらに生徒が主体的に取り組むことができるように支援する。　部活動について、顧問配置等検討が必要だと思われる。
3	進路指導・支援	・海外を視野に入れた各生徒の進路希望を把握し、その実現に向け、学習意欲を高め、幅広い学力の習得と定着を図るための授業実践に取り組む。 ・生きる力の育成を目指し、自主的に将来の進	・生徒自らが学力を把握し、目標設定ができるように指導する。 ・教育活動における ICT の活用を推進する。	・校内外で実施する各種説明会や模擬試験などを通じて、学力の充実に向けて主体的に取り組むことができるよう定期的に働きかけを行う。 ・生徒一人一人が ICT 機器を活用して、高大接続改革や大学入	・ガイダンスルームやチューター制など、さまざまなガイダンス機能を生徒自身が積極的に活用しているか。 ・各種説明会や模擬試験の意義を理解し、生徒自身が事前に目標を設定し、意欲的に取り組む	・各種説明会や模擬試験等、年次単位で組織的な進路指導の機会を設けることで、生徒の主体的な学びを促すことができた。 ・昨年度同様、ICT 機器を駆使して生徒一人一人の進路希望の実現に向けて、継続的な支援を行うととも	・年度当初からガイダンスルームを積極活用する３年次生が多い反面、１、２年次生の活用については課題が残った。 ・総合型選抜や学校推薦型選抜の対策について、生徒の進路希望に沿った指導をチューター制で、また職員	・いわゆる普通科進学校ではなく専門学科進学校としての教職員の苦労については承知している。新学習指導要領の改訂にともなって、今後大学入試がどのように変化するのかといったところも含め、ガイダンス G として進路情報の一層の研鑽が必要と考える。 ・一般的に生徒は目先の入試科目を意識して高校の選択科目を絞りがちで	・今年度の成果として、各年次において、統一した進路指導を目指す仕組みづくりである。 特に３年次において、出願等に関する説明会を全員出席とし、職員と生徒共通認識のもとで複雑な手続きを進めることができた。また、１、２年次向け進路説明会おいても各年次に沿った共通認識を深める機会となった。 ・来年度以降は、生徒への伝達事項だけではなく、３年間の計画性をもった進路指導を行う仕	・国内大進学及び海外大進学にむけたロードマップを作成し、３年間の見通しのある進路指導を行う。 ・カレッジカウンセラーとの連携を更に充実させる。

	視点	４年間の目標 （令和２年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 （　３月 12 日実施）	総合評価（３月 31 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
		路や職業について深く学び、人生設計ができる資質能力を育む。		試改革、海外進学など必要となる情報を主体的に入手、活用できるよう支援する。	ことができているか。 ・大学が掲げるアドミッションポリシーや学部・学科の特徴やキャリア目標を把握し、生徒自身のキャリア意識と結びつけることができているか。	に、本年度は職員向けた情報提供も積極的に行い、最新の進路動向に沿って、統一した校内指導を整備した。 ・サマプロにおいて「リーダーシップの授業」を実施し、参加生徒はリーダーシップについて実践に繋がる力をつけることができた。 ・文科省「高校講座」（オンライン）を実施し、国際的な仕事について参加生徒の視野を広げることができた。	全体で面接指導を分担し、組織的な指導を行うことができたが、３年間を通しての進路指導について更に整備を進めていきたい。 ・コロナ禍は今後数年の間は影響が予想される。感染予防を講じつつ、外部との連携を模索し、国際科及びIBコースそれぞれの実態にあわせて国内外問わず、生徒の主体的なキャリア形成を実現するために情報収集と支援に努めていきたい。	あるが、生徒一人一人の長い人生を踏まえたキャリアガイダンスを行うことが必須である。「どこの大学に行きたいのか」ではなく「将来何になりたいのか、そのための大学はどこか」といった横浜国際高等学校らしいキャリアガイダンスを今後も進めていって欲しいと考える。	組みづくりと、校内での協力体制を更に整備する必要がある。 ・国際科も IB コース（１期生）もそれぞれの特色を活かした選抜方法を活用し、国内外大の進学実績を残すことができた。本年度の指導状況を整理し、共通して指導できる範囲を広げ、どちらの所属であっても、等しく情報や指導が受けられる体制を目指していきたい。	
４	地域等との協働	・社会奉仕と環境問題について重点的に取り組み、生徒が主体的に関わりながら、地域に開かれた学校づくりを行うとともに、地域貢献・国際貢献ができるようにする。	・広報活動を通して、地域に開かれた学校づくりを実践する。 ・高大連携の活動を通じて、地域貢献・国際貢献に関する意識を高める。	・学校説明会および YIS 英語スピーチコンテストを、生徒主体で企画・実践する。 ・サマープログラムを通じて、東京外国語大学の授業を体験する。	・学校説明会および YIS 英語スピーチコンテストにおいて、地域の中学生および保護者に本校の取組を理解いただけたか。 ・東京外国語大学の体験授業を通じて、地域貢献・国際貢献に関する意識を高められたか。	・YIS 英語スピーチコンテストについては、感染防止のため外部への公開を行わなかったが、学校説明会については合計９回実施し、地域の中学生および保護者に本校の取組を理解いただくことができた。 ・慶応大学と連携し「アラビア語合同プレゼンテーション」を実施できた。	・感染防止のため、東京外国語大学を訪問して体験授業を受けることができなかった。来年度以降は、オンライン授業などを活用した体験授業を実施し、地域貢献・国際貢献に関する意識を高めたい。	・歴代管理職や教職員の取組みにより、地域との良好な関係は、旧六ツ川高等学校時代から現在まで継続していると考える。「社会に開かれた教育課程」の一層の実現に向けて、地域と WIN-WIN の関係が末永く続くことを期待している。	・合計９回の学校説明会を通じて、地域の中学生及び保護者に本校の取組を理解いただくことができたが、一方では、感染拡大のため、東京外国語大学を訪問して体験授業を受けることができず、地域貢献・国際貢献に関する意識を高めることが充分にはできなかった。	・来年度以降は、オンライン授業などを活用した体験授業の実施について東京外国語大学と協議し、地域貢献・国際貢献に関する意識を高めたい。 ・また、YIS 英語スピーチコンテストについても、実施の様子を動画像で記録し、ウェブ学校紹介サイトを活用して配信するなど、中学生および保護者の本校に対する理解促進を図りたい。
５	学校管理 学校運営	・ワークライフバランスに配慮した教員の働き方改革を推進する。 ・生徒の安全のために教育環境を整備し、併せて事故・不祥事防止に努める。	・ワークライフバランスを考慮したうえで、校内のさまざまなしくみを整備し、皆が働きやすい環境を整える。 ・不祥事防止を全校的な取組として徹底していく。	・行事予定表や清掃、消毒分担表などについて再吟味し、よりよいものにしていく。あわせて時差出勤などを利用しやすい環境を作っていく。 ・不祥事防止会議の内容を充実させるとともに、情報の伝達に努めていく。	・環境委員会の活動が活性化し、校内美化が進んだか。生徒や教員の清掃の負担軽減になったか。 ・県内の不祥事の事例を、他人事ではなく、自らの問題として認識することができたか。	・環境委員会の美化活動の回数が、前年度のおよそ２倍となり、効果を上げることができた。 ・県が作成した不祥事防止のビデオを視聴することにより、身近で切実な問題として考え直すことができた。	・業者による清掃の回数を増やし、さらに校内美化を徹底していく。 ・コロナ禍が収まったら、対面による各種の研修会を充実させ、職員の意識をさらに高めていきたい。	・スクール・ポリシーは非常に理解しやすい内容となっている。特に、国際科のカリキュラム・ポリシーの「SDGs などをテーマとした『総合的な探究の時間』」を軸に据えた教育活動は今日的なアプローチであり、その成果を期待している。予算に余裕があれば課題論文の冊子化も期待したい。	・今年度の成果として ①環境美化活動の充実 ②ICT 関連環境の充実 ③視聴覚資料も含めた図書館資料の充実 ④コロナ禍に対応する式典等の実施 ⑤私費負担軽減のための適切な対応 　などが挙げられる。 ・来年度以降に向けて引き続き地道な努力を続けることが課せられた課題である。	・来年度以降は、コロナ収束期を念頭に、速やかに以前の形に混乱なく戻す準備を入念に企画し、行っていくことが求められる。とりわけ、式典に関して最善の形を追求していきたい。 ・オンライン授業がますます重要視されていく中で、機器の更新を含めた ICT 環境の充実を目指す必要がある。